

5年1組

## わたしのお米になっていく 米づくりへの挑戦② ～私たちは米づくりの「本当」にどれだけ出会えるだろうか～



子どもたちと本気になって取り組んできた「お米作り」。ここでは、お米を育てていく中で出会った様々な出来事を紹介していきたいと思います。

### ☆お米の花を見つめる子どもたち☆

夏休み明け初日。久しぶりにみんなで田んぼに出かけました。休み前は70cmほどだった稲が、今では113cmにまで大きく成長しました。風が吹くたびに稲が揺れ、田んぼはとても美しい姿を見せてくれています。その様子を見ながら、「先生、さっき教室の窓から田んぼを見たらすごくきれいだったよ」と、3階から見える田んぼの風景の美しさに感動した子たちが教えてくれました。



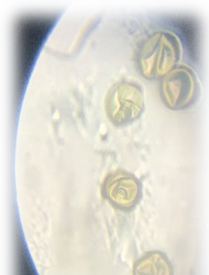
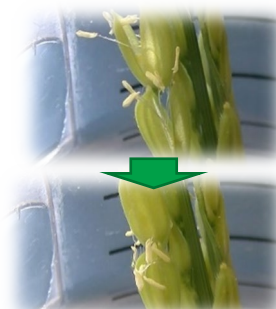
さて、田んぼに着くと、嬉しいことがありました。それは、稲の花が咲いていたことでした。穂が大きく開き、中の様子が見えました。子どもたちに伝えると、一斉に探し始めました。先ほどまで稲の大きく成長した様子をルーズで見ていた子どもたちが、今度はアップで稲を見始めました。「あった、あった」、「先生、ここにもあるよ。すごく沢山咲いてる」とあちこちから声が聞こえてきました。そしてKさんから「顕微鏡で見ようよ」ともっと詳しく見てみたいという願いが生まれていきました。私も、お米がどうやってできていくのか、子どもたちともっとよく知りたいたいと思い、みんなで花が咲いている穂を採取しました。Wさんは、採取したお米の花をじっと見ていました。そんなWさんに「どう？」と声をかけると「わからない」と返事が返ってきました。よく聞いてみると、それは、じっと観察して見えてきた様々な花のつくりの、「それぞれ役割についてのわからなさ」ということが分かりました。そのWさんも姿もまた、小さな穂、一粒に目が向いていっているようでした。帰り道、Wさんは両手で穂を守るように大事に持ちながら、またじっと穂を見つめ、教室まで帰っていきました。

教室に帰ると、子どもたちの持ち帰ったお米の花に変化が起きました。先ほどまで確かに開いていた穂が閉じてしまっていたのです。「もう受粉が終わったのかな」そんな声も聞こえてきました。この日は夏休み明け初日ということもあって、3時間目が終わり、下校時刻となってしまいましたが、次の日にお米の花を顕微鏡で見るのがとても楽しみになりました。そして同時に、これから再開するみんなのお米の学びの深まりに期待が膨らむ登校初日になりました。

### ☆『〇くらいになるのも、大きな成長してるんだな』☆

お米の花を観察するため、定点カメラを設置しました。後でカメラを確認してみると、「えい」という殻の部分がだんだんと閉じていく様子が映っていました。本で調べてみると、受粉を終えた「えい」は、一度閉じるともう開かないようです。その様子を子どもたちと一緒に見ながら、「お米が受粉するということ」を感じることができました。

動画を見た後、理科室に移動しました。顕微鏡で花粉を見るためです。子どもたちは班ごと渡された一つの穂にある「おしべのやく」を細い針を器用に使って、中にある花粉を取り出していくのでした。あちこちから「先生！見て！」という声が聞こえました。「すごい」、「これ気持ち悪い！」そんな声も聞こえてきました。顕微鏡をのぞかせてもらうと、肉眼では見ることでできない、花粉の世界が広がっていました。お米の花粉は不思議です。私のイメージでは、花粉はとがっているイメージでした。花粉を運ぶハチなどの動物に引っ掛かりやすくする仕掛けです。しかしお米の花粉は丸く、へこんでいるような形をしていました。お米の花粉は動物に運んでもらう必要はないからなのでしょう。そう考えると、花粉の形一つからも、考えたくなることがたくさん出てきます。



稲の花粉

おしべのやくに見える大量の花粉

観察の時間を終えると、Tさんは次のように振り返りを書きました。

お米の花粉が小さすぎてびっくりしました。これから「〇」くらいになるのも、大きな成長してるんだなーって思いました。

Kさんが花粉を観察して一番感じていたことは、一粒のお米にも、成長していく物語があるのだということではないでしょうか。それは、これまで稲全体を一つのものとしてとらえ、その成長に喜びを感じてきたKさんが、「たった一粒の穂」に視点を当て、その成長にも喜びを感じている姿なのだと思います。さらに穂の中で行われている生命の営みにも心が動かされているのではないかと私は感じました。「これから、あの小さな花粉から、一粒のお米になっていくのも『大きな成長』なんだな」と、お米の見方が深まっていきました。

## ★わたしたちのお米になっていく 5年1組米作りへの挑戦 ～稲刈り～★

稲刈りが終わり、すっかり稲がなくなった田んぼ。用水路に足を入れ、田んぼの泥を落としながら、Mさんは、「つかれた…」とつぶやきました。その声は誰かに伝えるような声ではなく、思わず口から出てきた言葉でした。Mさんの声を聞いて、私は「そうだよなあ…」と共感しながら、これまでにMさんや、クラスの子どもたちが本当に一生懸命、精一杯稲刈りと向き合ってきた3日間の姿、そして稲刈りとともに成長してきた子どもたちの姿を思い浮かべていました。

稲刈り初日の朝。私は子どもたちに一人一粒ずつ粃を配ったあと、教師が事前に田んぼで刈ってきた一株の稲を提示しました。それは子どもたちと共にこれまで大切に育ててきた稲がこの一粒からここまで成長したということに改めて感じ取ってほしいと願ったからでした。子どもたちは粃を手に取りながら、稲を見つめ、「こんなに大きくなったんだ」、「すごい」と声を出しました。その後、稲刈りの方法やなぜかけのやり方を動画で確認し、田んぼに向かいました。

田んぼに到着し、みんなで稲刈り鎌の扱い方について確認した後、作業を開始しました。子どもたちは大きく2つに分かれて作業を始めました。1つは田んぼに入って稲を刈る作業。もう1つは麻縄を切って、稲を縛り、なぜかけの準備をする作業でした。しかし、稲刈り作業をする人たちのほうが圧倒的に多く、どんどんと畔に稲が運ばれると、あっという間に畔が大量の稲でいっぱいとなりました。このままでは、縛る作業が追いつかなくなることに気づいた子どもたちは、いったん稲を刈る作業をやめ、全員が麻縄で稲を縛る作業を始めました。しかし、全員が畔に運ばれた稲を束にして持ち運び始めると、畔に置かれた稲はどんどん散乱していきました。その散乱した稲は、作業をしている子どもたちの足で踏まれたり、用水路に流されたりしました。その様子を見た子どもたちから、このままじゃだめだという声が上がりました。私もまた、このまま作業を続けていくことで、収穫することができるはずだった子どもたちの大切に育ててきた稲が収穫できない事態になってしまうのではないかと考え、「いったん教室に帰って作戦を立てよう」と子どもたちに伝えました。

教室に帰ってからの振り返りの場で、教師が、「今日の稲刈りどうだった」と聞いてみると、Rさんがすぐに手を挙げて「お米がかわいそうだった」と話しました。「なんでかわいそうだったの」と聞くと、Rさんは続けて、「だって、刈ってからすぐに結べばいいと思うんだけど、でも今日は、一気に刈ってから結んだから、下にすごい余って踏まれちゃって…。無駄になって…食べられたはずなのにかわいそう」と思いを語ってくれました。それは、ほかの子たちにとっても同じ思いでした。そこから「どうしたらみんなの力を合わせて効率よく作業ができるのか」というわたしたちにとっての問いに向かって考え始めたのです。その話し合いを経て子どもたちは次のようなやり方を決めだしていきました。



- ①2人のペアで行う。②片方が稲を刈り、片方が稲を受け取る。③受け取る側の稲が束になったら、稲刈りをしていたほうが結ぶ。④結んだ稲をブルーシートの上に置く。⑤交代して行う。

稲刈り2日目。自分たちで決めだした方法で稲刈りをする子どもたちは、とても楽しそうに稲刈りを行っていました。途中、Sさんが、「先生、今開始してから何分くらい」と聞いてきました。私が「開始してから30分だよ」というと、それを聞いていたNさんが、「え？まだ30分？すごい！」と笑顔で言いました。子どもたちは、費やした時間と縛られている稲の量を感じながら、昨日との違いを実感していているようでした。そして「お米がかわいそうだった」と言っていたRさんが、「無駄になってない…」とつぶやきました。この日、子どもたちは前回の2倍以上のスピードで作業をすることができました。あと残り半分まで来たのです。

そして3日目。「残り半分を一気にやっぴまおう」そんな思いで田んぼに向かいました。午前中前回と同じように稲刈りをしましたが、今回の稲刈りの場所がとてもぬかるんでいて苦戦しました。途中からはなぜかけ作業と稲刈り作業に分かれて学校と田んぼそれぞれで作業をしました。しかし、午前中で終わると思っていた作業は、もう少しのところまで終わりませんでした。「今日中にやりたい」という子どもたちのエネルギーを感じ、私は午後も残りの作業をやらないかということ子どもたちに伝えました。そして、最後は全員で田んぼに向かいました。その時の子どもたちの姿を見てとても驚きました。それは、2日目に行ったようなペアでの作業をしているわけでもなく、かと言って1日目のような姿でもありませんでした。稲を刈る人、運ぶ人、稲を洗う人縛る人、落ち穂を拾う人…自然と自分がやることを決めだしていきながら動き出していき姿がそこにはありました。

最初は稲刈りを単に楽しみなものという、ある意味お楽しみとしての行事ととらえていた子どもたち。それは私自身も同じでした。しかし、いざ刈り始めたとき、刈っただけでは作業がうまくいかないどころか、自分たちの大切にしているお米を無駄にしてしまう事実と出会いました。そしてどんなに頑張ってもすぐには終わることのない作業にも出会いました。そんな「稲刈り」を経験する中で、自分の納得のいかない思いや、どうしようもなさと同じような思いながら子どもたちは「稲刈り」を自分事としてとらえていきました。

